

科学館で行われたワークショップのアンケート調査結果からの考察 —小学生および未就学児の親が博物館に求める教育について

Reflections from the Results of a Questionnaire Survey of Workshops Held at Science Museums
-The Education that Parents of Elementary School Children and Preschool Children Seek from Museums

○奈良崎 裕汰¹, 伊豆原 月絵²

*Yuta Narasaki¹, Tsukie Izuhara²

The authors believe that the purpose of the workshop is to provide an opportunity for participants to think for themselves and learn through participatory experimentation and production. In this paper, the authors conducted a questionnaire survey of parents of preschool and elementary school children who participated in workshops held by the authors. The purpose was to examine the nature of museum workshops based on the results of the survey on what parents expect and want from the education provided by museums.

1. 背景

学芸員課程を履修する有志学生の MA (ミュージアム・アソシエイツ) と本学の学芸員課程の教員の伊豆原は、昨年の 2022 年度に続き、科学技術館で開催された「青少年のための科学の祭典」の理工学部の出展者として参加した。本年は、2023 年 7 月 29 日、30 日に「スライムの変身！—化学変化と流動時間の測定—」のワークショップを行った。

本論文では、ワークショップの目的を次のように考えている。「博物館で行われる、体験型・参加型の実験やモノづくりを通して、参加者が自ら思考する、学ぶ機会を提供する目的で行われるもの」とする。

博物館の学芸員は、来館者に展示やワークショップを通じてさまざまな学びの機会を提供し、教養を深める教育プログラムを考えて作成している。

筆者らが提供した教育プログラムのワークショップに参加したお子様の親に対して実施したアンケート調査をもとに、その博物館に就学前の子どもおよび小学生の子どもを博物館に連れてくる親は、博物館が提供する教育に対して、どのようなことを期待し求めているのか、また親が未就学児の子どもに対してどのような教育を考えているのかなどを調査し考察を行った。^①

2. 内容

このワークショップでは次のような実験を行った。第 1 の実験は、参加者が、何も入っていないビーカーに、自ら水溶液を加え、スライムを作成することを第 1 の実験とした。第 2 の実験は、作成したスライムを 4 等分にし、それを 3 つのスライムにそれぞれ違った試料を加えるとどのような変化が起こるのかを観察す

る実験を行った。第 3 の実験は、何も加えていないスライムとそれぞれ試料を添加したスライムの流動時間を計測し、観察する実験を行った。

3. 参加者の子どもへの聞き取り調査結果

参加した子どもへの聞き取り調査によるアンケートでは、「楽しかった」、「スライムの感触に興味を持った」、「スライムの化学変化に興味を持った」など、筆者らのワークショップが興味関心を持って楽しんで体験できたことが分かった。



Figure1. The state of the experiment

4. アンケート調査方法

付き添いの親に、ワークショップ参加の目的や教育に関する質問を Google form の QR コードを作成しアンケート調査を行った。64 名のワークショップ参加者の内、アンケートフォームに回答した方は 2 日間で 32 名であった。アンケートの質問内容は、「参加者の年齢」、「青少年のための科学の祭典に参加した理由」、「このワークショップを選んだ理由」の 6 項目についてである。

5. アンケート結果

Fig.2 のように、参加者は、6 歳から 8 歳が 52%とな

1：日大理工・学部・物理 2：日大理工・教員・一般

り、小学校低学年が最も多く、ついで、小学校の中学年が19%であり、就学前の幼児が23%であった。低学年は、小学校では、まだ理科の授業を受けていないため、実験などの理科教育に興味をもつきっかけになったと思われる。また Fig.3 より、53 のワークショップが実施されているが、7倍以上の倍率となり人気が高かった。筆者らのスライムの化学実験に参加した理由として、Fig.5 では「楽しそうだから」が1番に挙げられている。他にも「博物館によく行く」が10人、「教養を深めるため」が13人いた。Fig.2, 4 より「博物館によく行く」と答えた人は、50%の人が青少年のための科学の祭典に3回以上の参加の経験があった。

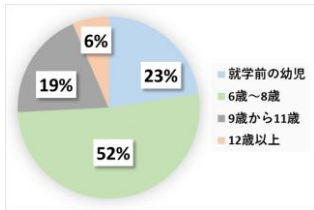


Figure2. The age group of participants

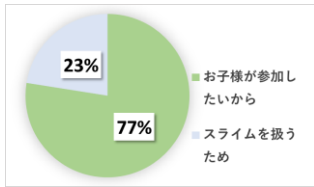


Figure3. Reasons for participating in the workshop.

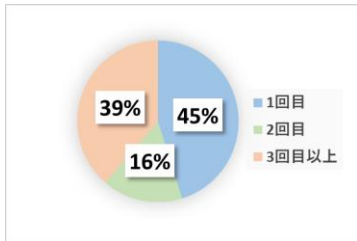


Figure4. Number of experiences participating in the Youngster's Sci. Festival

6. 考察

筆者らがワークショップに参加した子どもの親に行ったアンケート結果から、親は博物館で学ぶことの重要性を理解し、ワークショップに度々参加していることが分かった。

しかし、第一生命経済研究所生活調査モニターが行った首都圏の小中学生の親を対象にとったアンケート結果では、Fig.6 のように「博物館に連れていきたくても子供の面倒が大変であること」や「子供が楽しめない」などの回答があった。また Fig.7 では、博物館に求めるものとして、「子どもが理解しやすい展示を作って欲しい」や「子どもの教育にも寄与するようなワークショップや鑑賞教室などを充実させて欲しい」

などの意見があげられていたことから、これら2つのアンケートの結果から、親は博物館に子供の教育機会を積極的に提供することを求めていることがわかる。

7. まとめ

博物館における教育の対象は、老若男女問わず、すべての人々を対象に行われる。^[3] 学びにとって重要な点は「その分野にとってどれだけ興味関心を持つことができるのか」ということであり、私たちは科学教育をする中で子どもたちに科学の面白さや重要性を知ってもらうように努める必要がある。しかし、子どもは大半が一人で博物館に行かれないことから、親が博物館に連れていくことで子どもは、学校教育以外の学びの機会を得られ、その結果、科学教育にもつながる。博物館に行くことで親にとっても学びの場となる。

博物館や学芸員は、「またもう一度来たい」と思ってもらえるような教育プログラムを考えてワークショップを開催することが重要だと考える。

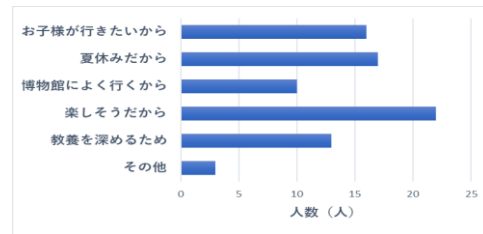


Figure5. Reasons for participating in the Youngster's Sci. Festival

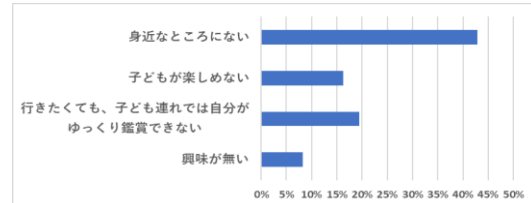


Figure6. The reason why you didn't go to the museum^[2]

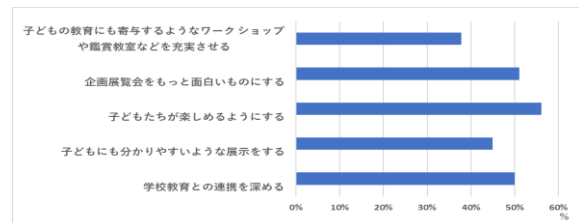


Figure7. A request to the museum^[2]

8. 参考文献

- [1] 中村絵里, 「親による教育関与に関する研究の動向と展望」, 東京大学大学院教育学研究科, 第58巻, p1-9, 2018年
- [2] 的場康子, 「育児世代の美術館・博物館の利用実態」, 第一生命経済研究所, 176号, p4-15, 2006年
- [3] 浜田弘明, 「「これからの博物館に求められる役割」について」, 文化庁, 2021年